

宮田直彦のエリオット波動レポート

マーケット見通し(短期アップデート) 4 月 18 日 10:55AM 更新

[日経平均]

【当面の想定レンジ】 31,500～36,700 円

[NY ダウ・S&P500]

【当面の想定レンジ】 (NY ダウ) 36,500～42,200 ドル
(S&P500) 4600～5750

[ナスダック]

【当面の想定レンジ】 14,500～18,300

[米ドル/円]

【当面の想定レンジ】 137.000～146.000 円

[ドルインデックス(ドル指数)]

【当面の想定レンジ】 95.000～105.000

エリオット波動とは

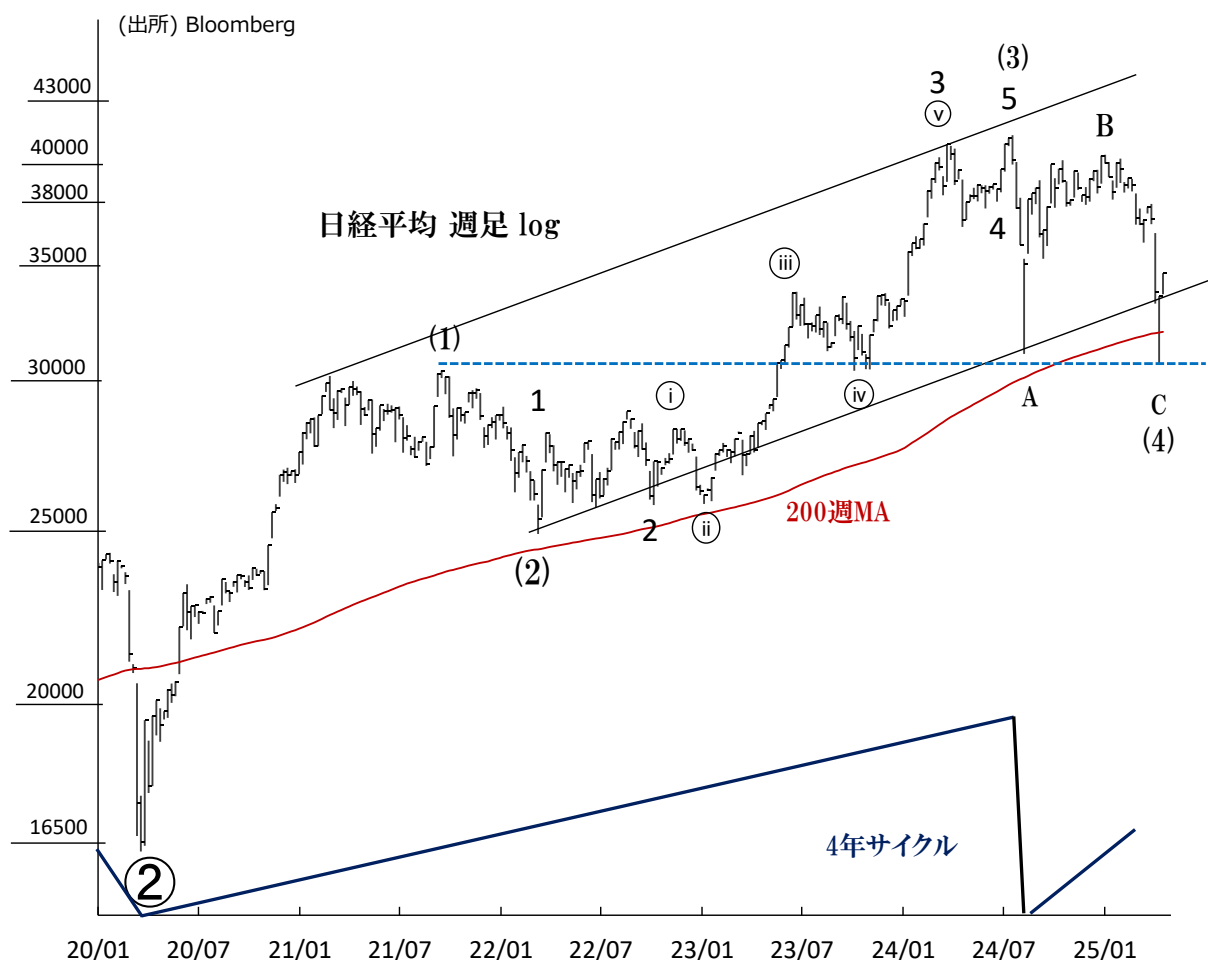
株式・為替動向を予想する心強いテクニカル手法

米国人ラルフ・ネルソン・エリオットが提唱した、今後の株式や為替など市場価格の動向を予想する手法です。相場は5つの上昇波と3つの下降波（合計8つの波）で一つの周期を作るパターンに従って展開するとされます。

このパターンは集団心理によるもので、数分から数十年といった様々な時間軸において観察されます。

フィボナッチ数列、黄金分割比率をチャート分析に初めて導入したのもエリオットです。

日経平均



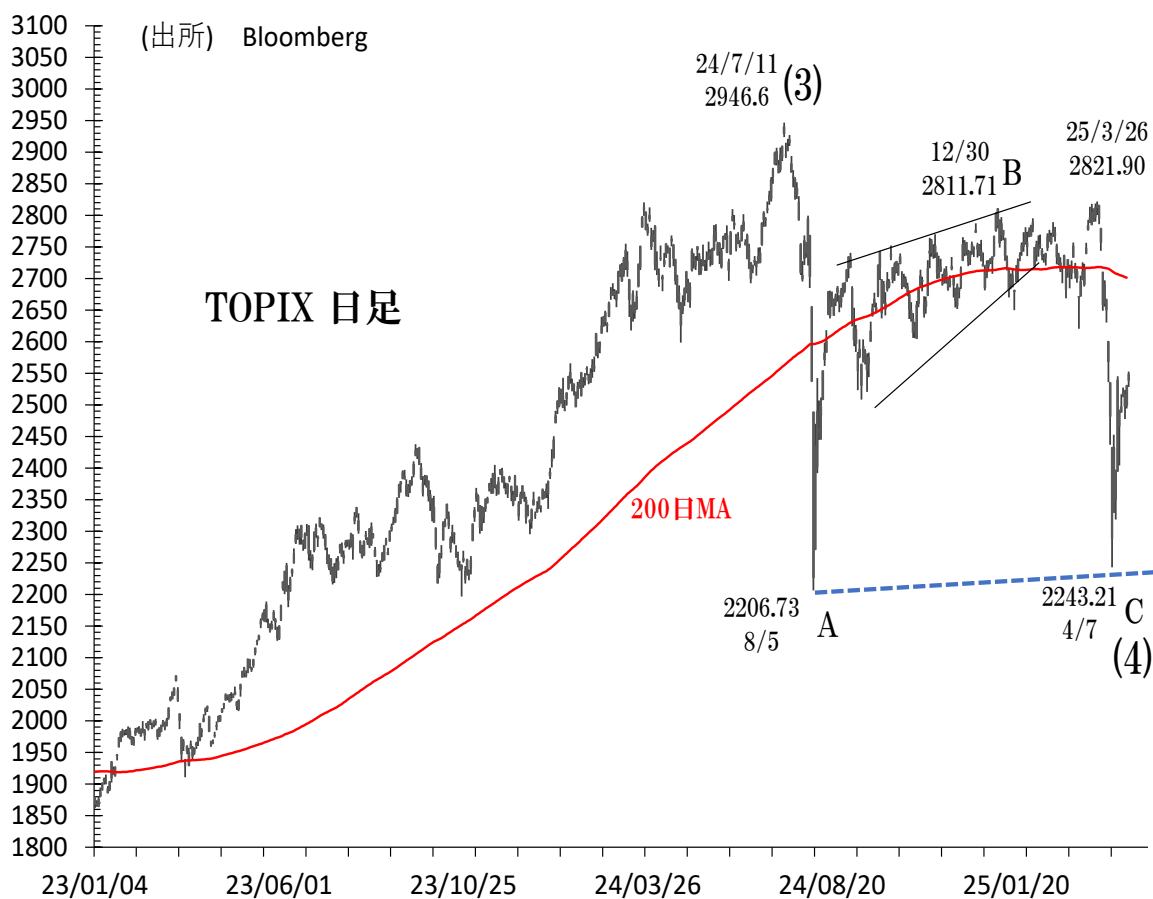
【週足 エリオット波動分析】

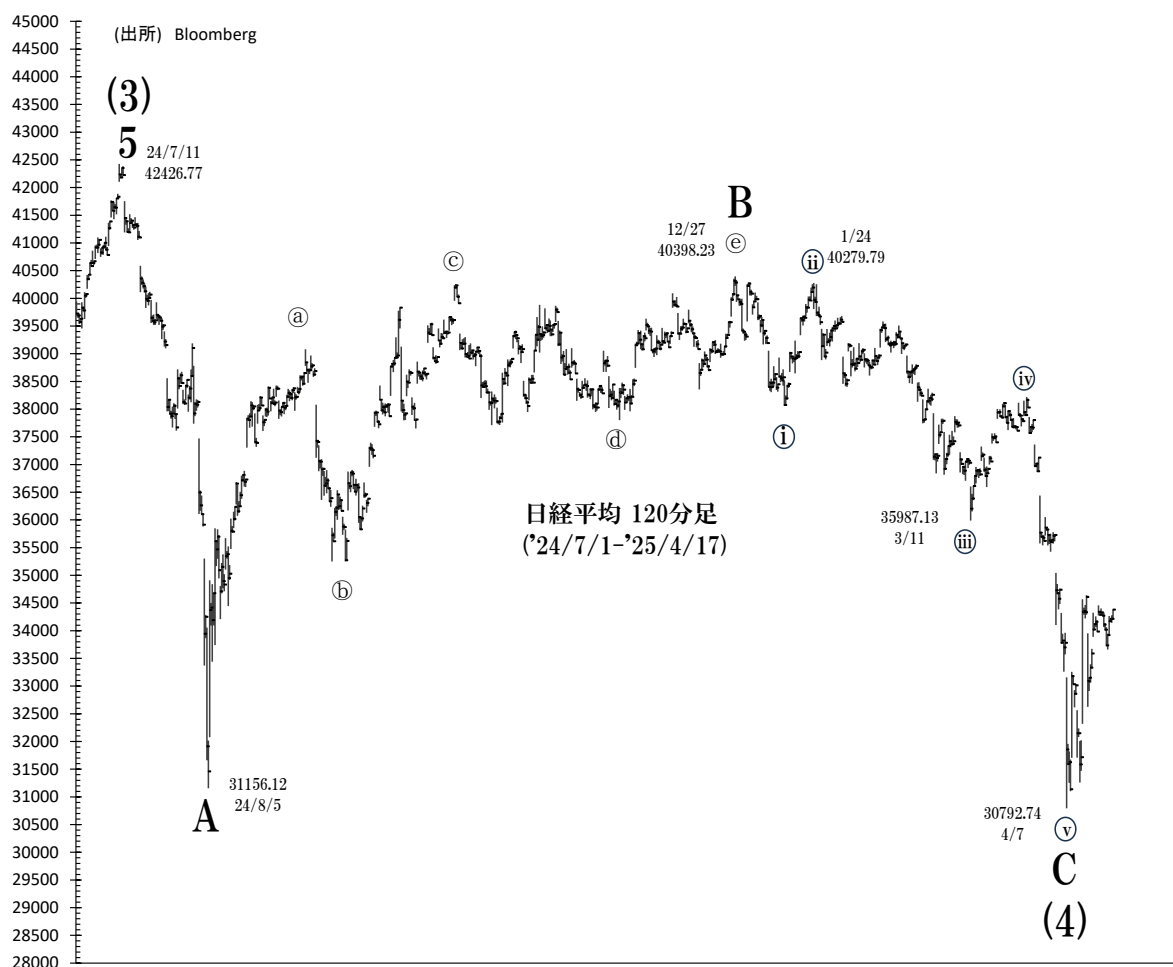
4月7日の安値(30,792円)は、インターミディエイト級(1)波高値(30,795円)を3円だけ侵犯し、1波と4波が重ならない「ノーオーバーラップ」の原則に抵触しました。一方TOPIXの1波と4波は重ならず、4月7日安値(2243)は24年8月底(2206)に対し切り上がりました。

このような、**日経平均とTOPIXの間の「未確認」は底入れのサイン**として大いに注目できます。

4月7日の東証プライム市場出来高は36億6374万株に急増し、24年8月底(40億9000万株)に次ぐ大きさでした。**TOPIXはセリングクライマックス型の「二番底」を付けた可能性が高い**、とみられます。

日経平均に戻ると、重要サポートとしての200週MAを週末値で維持しました。このことにより、プライマリー上昇波は続いている、とみることができます。そうであれば、**日経平均は今後数カ月内にインターミディエイト級第(5)波の上昇に移行する可能性があります**。





【日足・時間足 エリオット波動分析】

4月7日の安値(30,792円)を以て、24年7月高値(42,426円)からのインターミディエイト級(4)波は、「フラット」調整で終わったかもしれません。

当面の上値レンジとして、**[35,595円～36,728円]**(24年12月高値 40,398円からの下げ半値戻り～61.8%戻り)が想定されます。

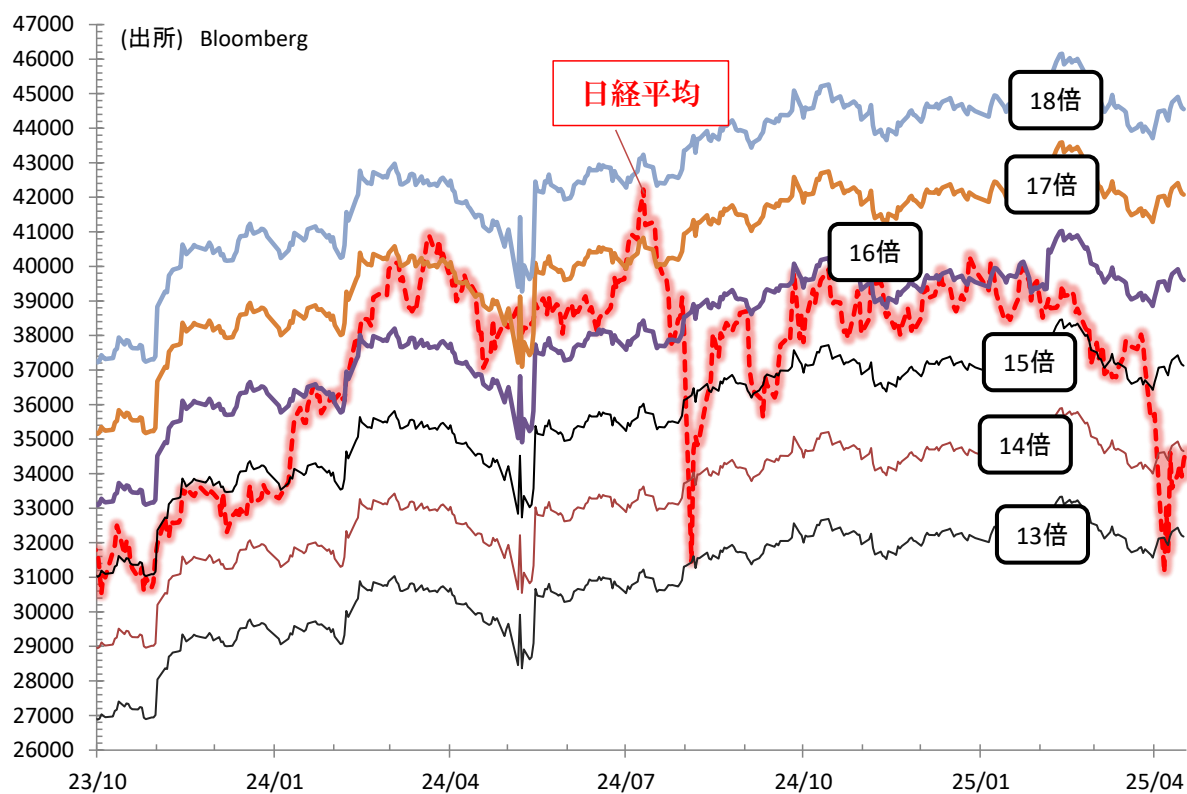
もっとも同レンジでは、大量の「やれやれの売り」が待ち構えていると思われます。**4月7日に底打ちした可能性は高いと思われますが、(24年8月底直後のような)V字型回復は期待薄でしょう。**

さらにいえば、30,792円を下抜く場合は従来の波動カウントに疑問符が生じ、別のカウントを考察する必要があります。

[予想 PER 別の日経平均水準]

日経平均予想 EPS は 2474 円(4/17)。過去最高は 2564 円(2/13)です。

なお歴代 3 位の下げとなった 4 月 7 日の PER(12.59 倍)は、24 年 8 月 5 日「令和のブラックマンデー」の 13.01 倍を下回りました。



NY ダウ・S&P500



【日足 エリオット波動分析】

昨年末に想定した通り、NY ダウの調整規模は 22 年 10 月以降で最大のものに拡大しています。4 月 7 日には一時 36,611 ドルまで下げ、22 年から上昇の半値押し[36,807 ドル]に達しました。

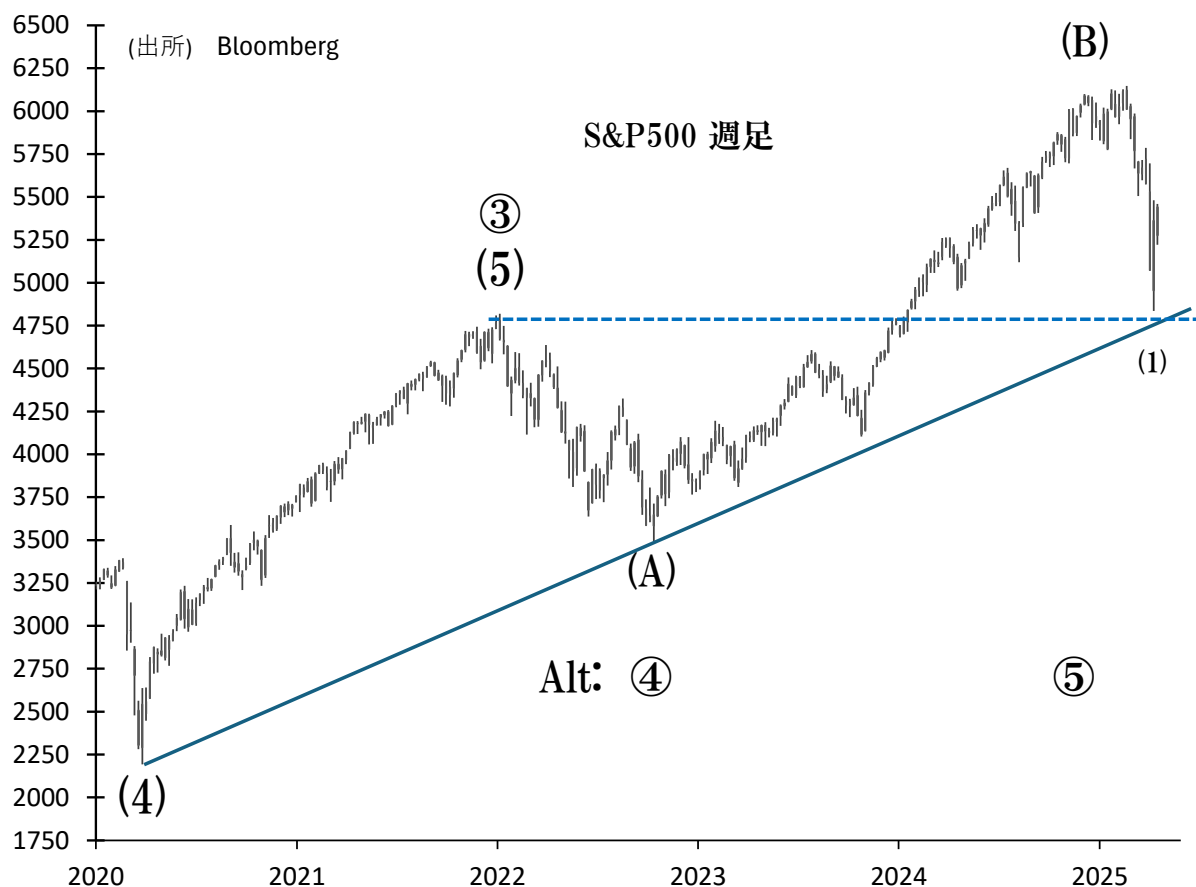
足元の上昇は第(4)波、あるいは第(2)波によるリバウンド局面に位置付けられます。

引き続き 200 日 MA(42,205 ドル)付近までの戻り余地はありますが、その後に到来する下落局面には引き続き注意が必要です。

なお 200 日 MA 水準まで戻る代わりに、横ばいの動き(トライアングルなど)が当面続く可能性もあります。もしそうなれば、現在は第(4)波であることの証左になります。

いずれにしても、今後数週間から数カ月の内に、36,611 ドルを下抜く展開になると思われます。

22 年 1 月～10 月の(A)波は 22.4%下げました。(C)波はそれと同等か、より大きな下落スケールになると思われます。試みに最高値から 22.4%下げる水準は[34,977 ドル]であり、3 万 5000 ドル処は中期タームで順当な下値目標とみられます。



【S&P500 週足 エリオット波動分析】

筆者の長期的な波動カウントは、22 年 1 月高値(4818)以来、プライマリー級④波による調整(A)-(B)-(C)が進行中というものです。そのうち(B)波は最高値を更新し続け、今年の高値を以て「イレギュラートップ」を終了しました。そこからは(C)波による下落が進行中とみられます。

④波中の(A)波は 27.84%下げました。(C)波も同率で下げるとすれば、下値メドは[4435]となります。

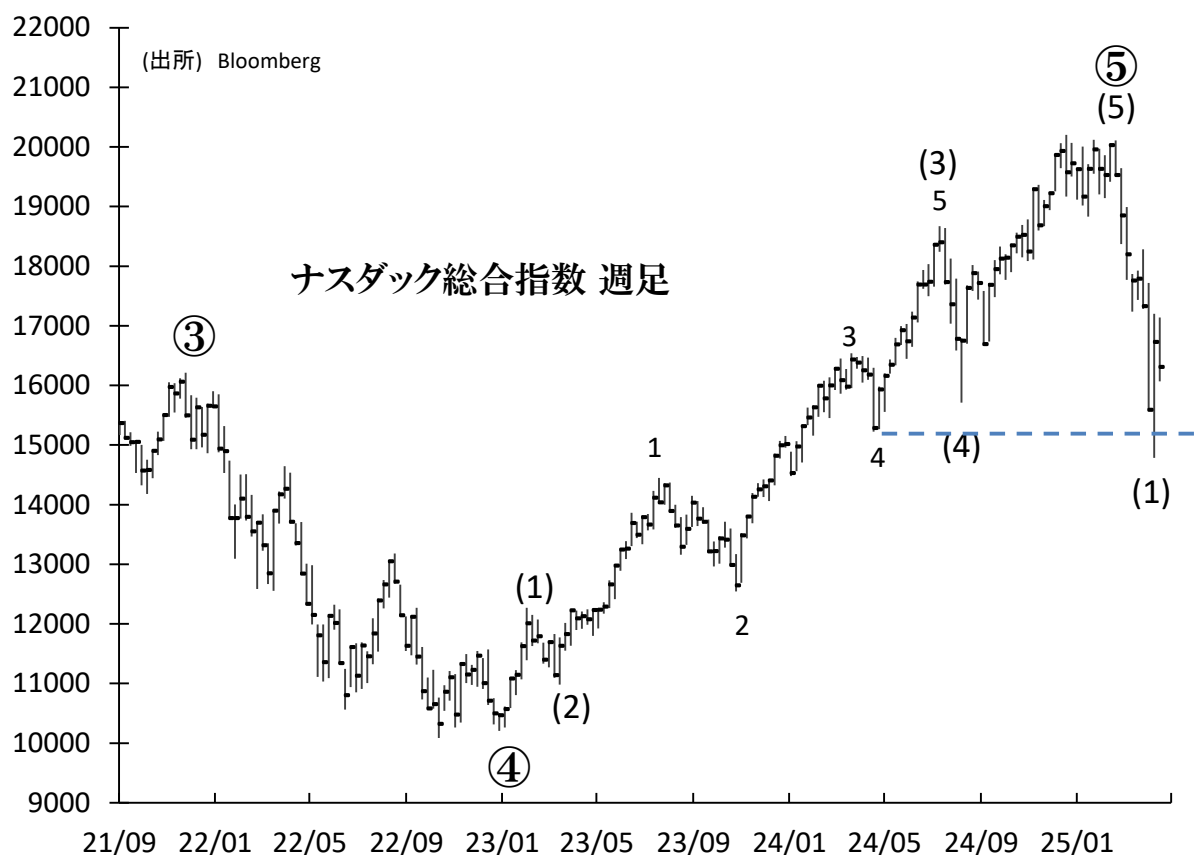
④波が「エキスパンディッド・フラット」になる可能性にも留意しておかなければなりません。この場合には、(C)波安値は、(A)波安値[3491]を下抜くことになります。

(C)波の完了を以てプライマリー級④波のすべてが完成し、数年単位の強気トレンド(プライマリー級の第⑤波)が開始されるでしょう。ハイテク株で構成されるナスダックとは違い、ハイテク株と非ハイテク株のハイブリッドである S&P500 は、いずれ最高値を更新する可能性もありそうです。

4835(4/7 安値)からはリバウンドとなっています。22 年 1 月高値[4818]と、20 年からのサポートライン、これらによって下支えされたことがわかります。

現行リバウンドのメドとして、[5491-5646](2 月からの下落の 50%-61.8%戻り)が目されます(今のところは 4 月 9 日に付けた 5481 が戻り高値です)。現行リバウンドが仮に第(2)波とすれば、近々第(3)波による急落が始まることになります。

ナスダック



【ナスダック総合指数 週足 エリオット波動分析】

ナスダック総合指数(以下、ナスダック)は、24 年 12 月安値(20,204)からサイクル級の調整が進行中とみられます。

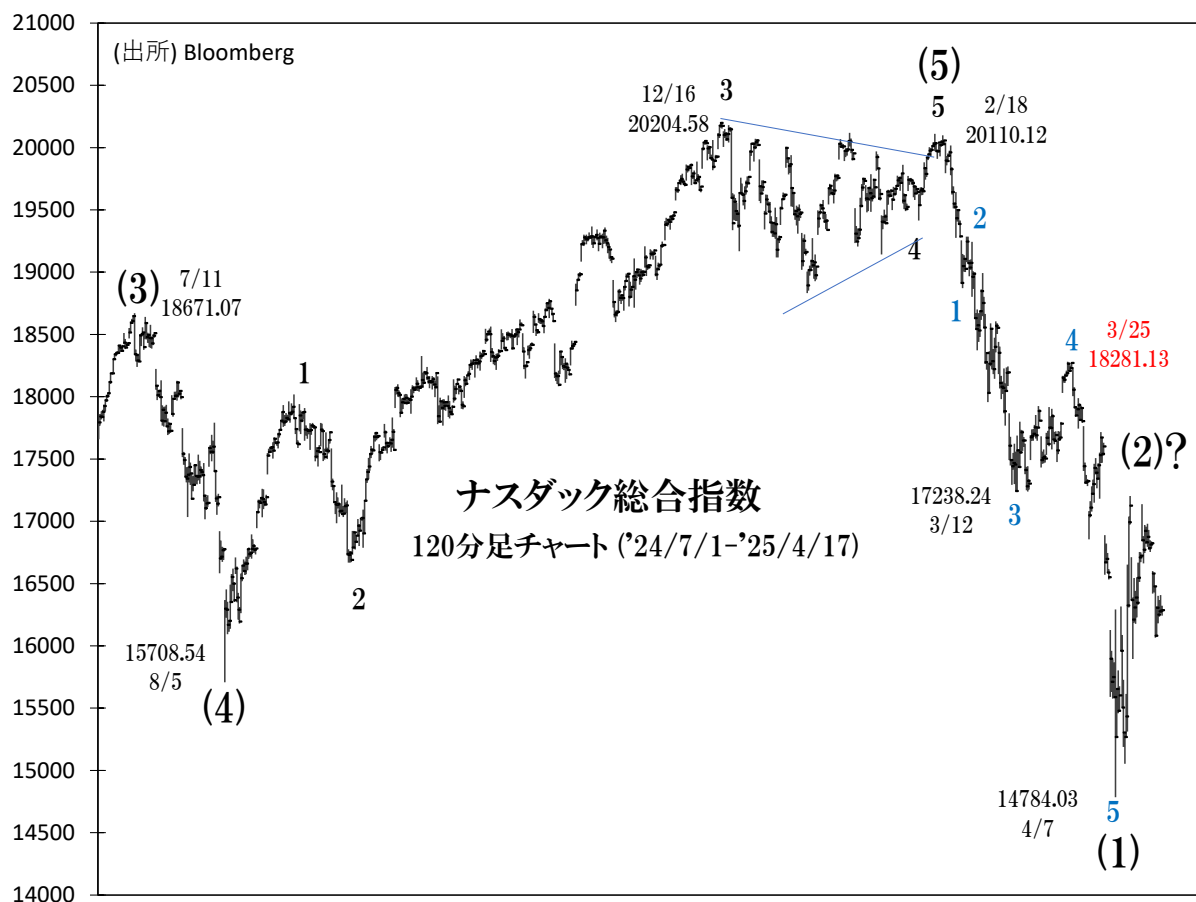
21 年～22 年のプライマリー④波の下げ率(37.77%)は、ほぼフィボナッチ比率(38.2%)でした。

今後 1～2 年という期間では **[12,527]** (24 年 12 月高値から 38%下げる水準)へ下押す可能性もあるでしょう。

さらに、**先々で④波安値[10,088]への下値試しとなる可能性にも留意**するべきでしょう。サイクル級の調整は、プライマリー級のそれよりも一つ上の波動等級(ディグリー)だからです。

14,784(4/7 安値)から第(2)波によるリバウンドが展開していますが、それはまだ続いているかもしれません。もっとも、**リバウンド完了後には第(3)波の下落によって、14,784 を下抜く可能性に注意**が必要です。





【時間足 エリオット波動分析】

14,784(4/7 安値)からは第(2)波によるリバウンドとみられます。

この第(2)波は、2 月からの下げに対する 50%-61.8%を引き返すとみられます。この見方によると、**想定される上値レンジは[17,447-18,075]**です。想定レンジ上限付近には、第(1)波のレツサー・ディグリー4 波高値 18,281(3/25)、そして 200 日 MA(18,378)などがあります。

この波動カウントが正しければ、第(2)波によるリバウンドが終了すると、次は第(3)波の下落が続くことになります。そしてこの第(3)波は 14,784 を明確に下抜く見込みです。

米ドル/円



【月足・エリオット波動分析】

151.899 円(22/10/21)から⊗波「円高局面」が進行中です。この⊗波により米ドル/円(ドル/円)は、2028年4月頃までレンジ相場を形成する、というのが基本シナリオ。24年7月の161.938円は、15年6月・125.860円から9年目に付けた「8年サイクル高値」とみられます。

22年10月以来の⊗波が描くパターンとして大きくは、①[ランニング・トライアングル]、②[エクспанディッド・フラット]、これら二通りの可能性があります。

①の場合、現行C波はA波安値(127.158円)を下回りません。C波は三波で構成され、2011年からの上昇チャネルのセンターライン(①)が強いサポートになるでしょう。

①の水準は136.425円(4月)に位置します。

②の場合は、現行C波(五波構成)はチャネル下限(②)を目指すような、より大きなドル安・円高が見込まれます。②の水準は116.800円(4月)です。



【週足 エリオット波動分析】

161.938 円(24/7/3)からは C 波によるドル安・円高トレンドです。月足分析で記した B 波[トライアングル]説によれば、C 波は三波構成 (a)-(b)-(c) になります。158.825 円(1/10)から、©波によるドル安・円高が進行中とみられます。

足元のドル円は一時 142 円を割り込み、過去 2 年間にわたるチャネルから下放れつつあります。NY 市場終値で 142 円を下回るようなら、チャネル下限から下放れ開始と判断され、まずは 24 年 9 月の 139.565 円を試すでしょう。さらには[138.517 円-136.452 円]を窺うことになるでしょう。

[138.517 円]…©波と©波が等しく下がる水準

[136.452 円]…24 年 7 月から 9 月までドル/円下落幅と、今年 1 月からのドル/円下落幅が等しい

ヘッド・アンド・ショルダーズ

139.565 円を NY 市場の終値で下回るようだと、それはヘッド・アンド・ショルダーズ型天井の完成を告げるものになるでしょう。この弱気パターンによれば、ドル/円は今後[127.158 円]を試す可能性があります。

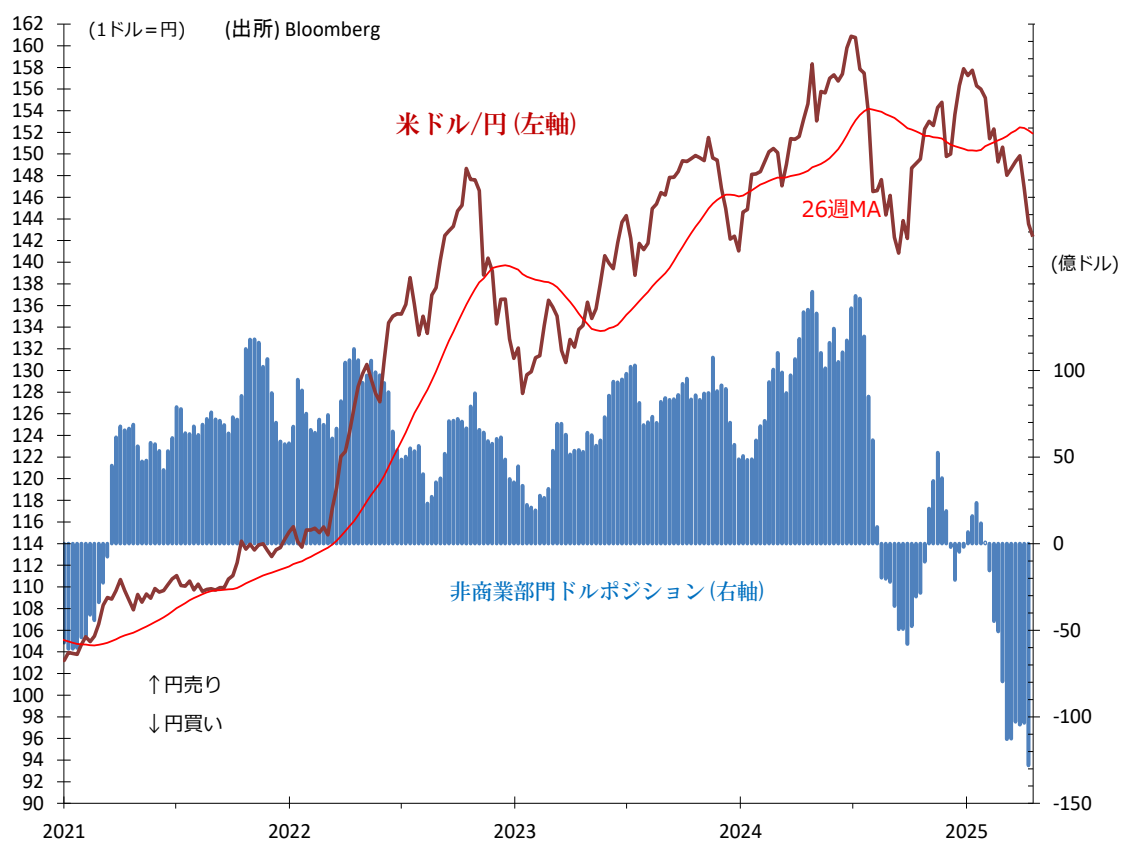
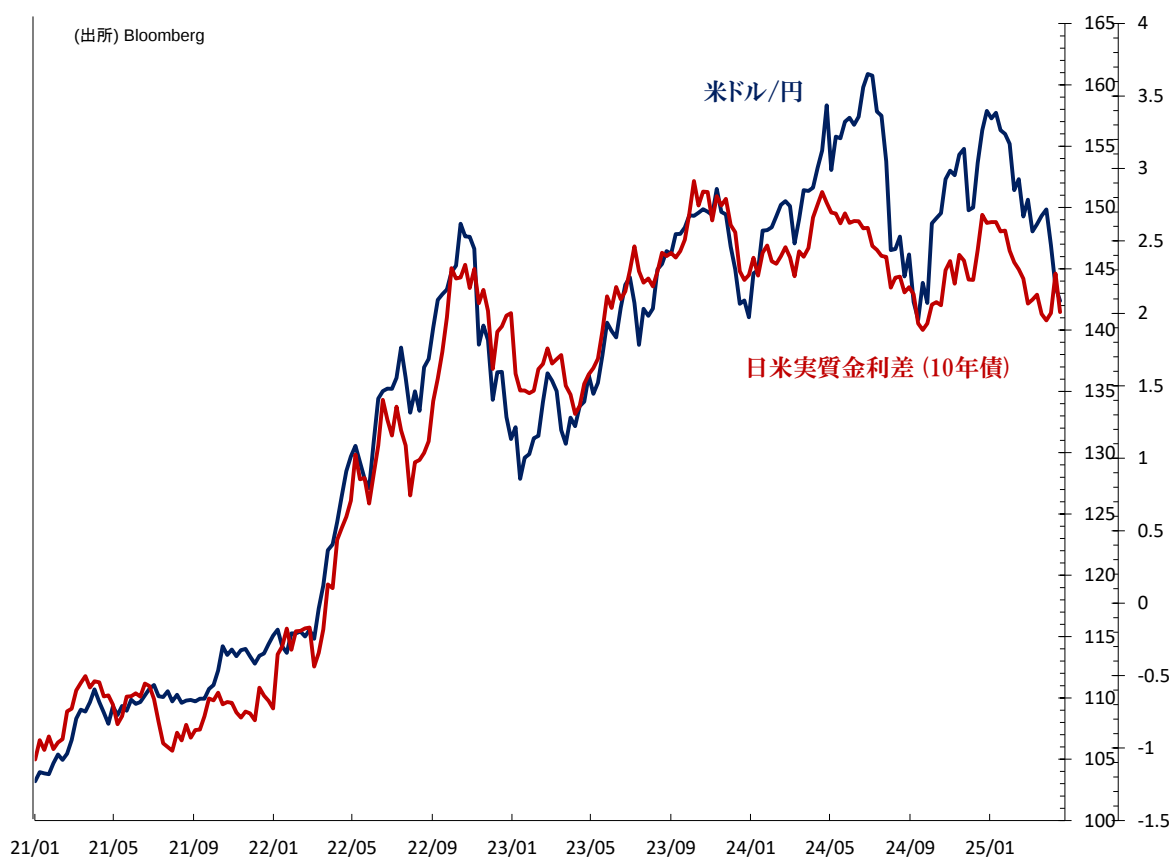


151.191 円(3/28)から、第 3 波によるドル安・円高が進行中とみられます。

金利差からのドル/円推計値

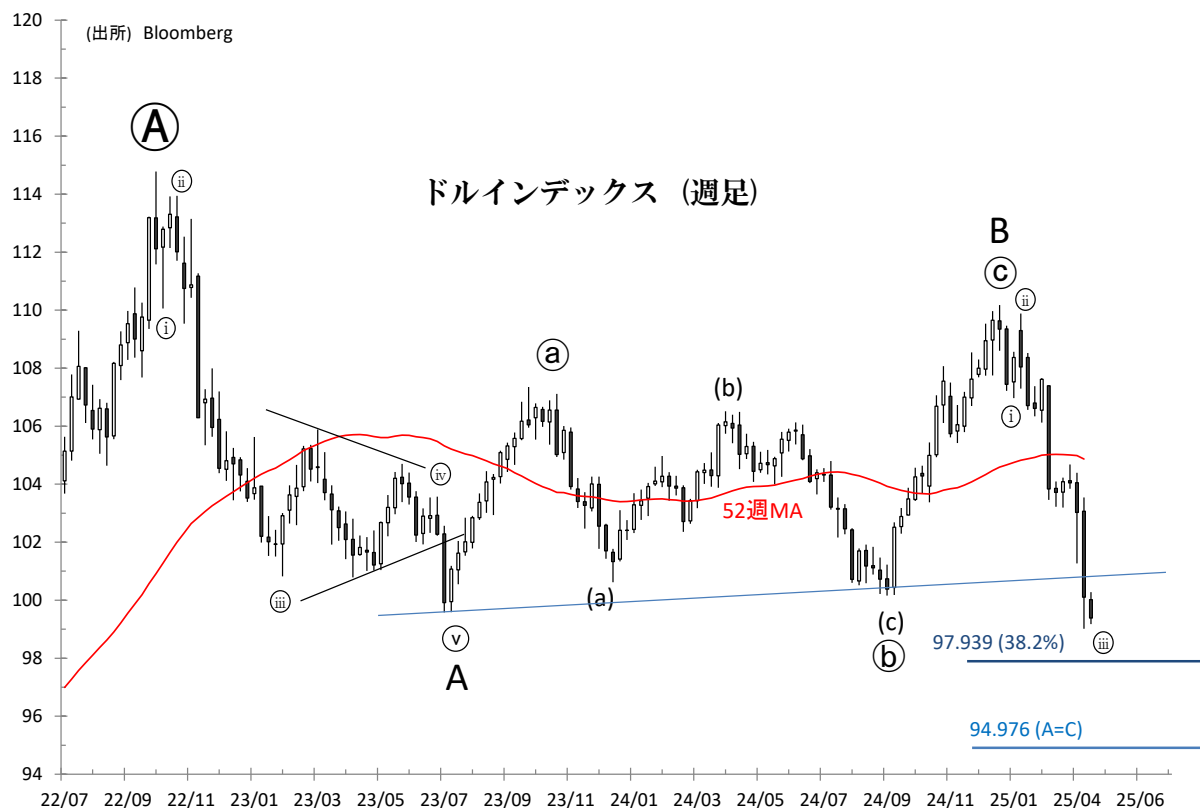
投機筋の円買い持ち高が過去最大に(2025 年 4 月 8 日時点)

13





ドルインデックス (ドル指数)



【週足 エリオット波動分析】

4月11日、一時99.014までドル安が進行し22年4月以来3年ぶりドル安水準となりました。筆者が予想していた通りの展開です。

08年からのドル高に対する38.2%押し水準[97.939]を目前に控え、C波中マル iii 波によるドル安は、そろそろ終わるかもしれません。

もっともC波自体はまだ続いています。短期的なドル反発が起きても一時的なもので、いずれC波中マル v 波のドル安が到来するでしょう。

22年9月～23年7月のA波において、ドル指数は10カ月で13.2%減価しました。C波も同様と仮定すると、今年11月頃にドル指数が[95.632]まで下げる可能性を指摘できます。

なおA波とC波が同幅下げるとすると[94.976]が得られます。

※当レポートは、情報提供を目的としたものであり、特定の商品の推奨あるいは特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。

※当レポートに記載する相場見通しや売買戦略は、ファンダメンタル分析やテクニカル分析などを用いた執筆者個人の判断に基づくものであり、予告なく変更になる場合があります。また、相場の行方を保証するものではありません。お取引はご自身で判断いただきますようお願いいたします。

※当レポートのデータ情報等は信頼できると思われる各種情報源から入手したものです。当社はその正確性・安全性等を保証するものではありません。

※相場の状況により、当社のレートとレポート内のレートが異なる場合があります。

当社サービスに関する注意事項

・取引開始にあたっては契約締結前書面をよくお読みになり、リスク・取引等の内容をご理解いただいた上で、ご自身の判断にてお願いいたします。

・当社の店頭外国為替証拠金取引および店頭 CFD 取引は、元本および収益が保証されているものではありません。また、取引総代金に比較して少額の資金で取引を行うため、取引の対象となる金融商品の価格変動により、多額の利益となることもありますが、お客様が差し入れた証拠金を上回る損失が生じるおそれもあります。また、各金融市場の閉鎖等、不可抗力と認められる事由により店頭外国為替証拠金取引および店頭 CFD 取引が不能となるおそれがあります。

・店頭外国為替証拠金取引、店頭 CFD 取引における取引手数料は無料です。

・当社が提示するレートには、買値と売値に差（スプレッド）があります。流動性が低くなる場合や、天変地異または戦争等による相場の急激な変動が生じた場合、スプレッドが広がる場合があります。

・店頭外国為替証拠金取引に必要な証拠金額は、個人のお客様の場合、取引総代金の 4%以上です。法人のお客様の場合、取引総代金に、金融先物取引業協会が算出した通貨ペアごとの証拠金率（為替リスク想定比率）を基に当社が算出した証拠金率を乗じた金額となります。為替リスク想定比率は、金融商品取引業等に関する内閣府令第 117 条第 27 項第 1 号に規定される定量的計算モデルを用い算出します。なお、証拠金率（為替リスク想定比率）は変動いたします。店頭 CFD 取引に必要な証拠金額は、取引総代金の 10%です。

金融商品取引業 関東財務局長（金商）第 2797 号

【加入協会】日本証券業協会 一般社団法人 金融先物取引業協会
株式会社マネースクエア
